
靈魂達のシャングリラ

荒城間左衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

靈魂達のシャングリラ

【Nコード】

N9374R

【作者名】

荒城間左衛門

【あらすじ】

気が付いたら魔法の飛び交う異世界にワープしていた主人公。でもその世界はどこか歪んでいて…。

百億を超える蔵書を抱える大図書館。

魔法使い達が住む摩天楼。

狂った兵士が闊歩する天空古城。

そして…30年前に発生した、誰もがその日を覚えていない空白の5日間。

この世界はきつと、靈魂達の楽天地。

いわゆる異世界ものです。

また、主人公が狂ってます。後々恋愛要素も入れますが、苦手な方はリターンキーを押してくださいませ。

誤字訂正ありましたら報告お願いいたします。

ブローグ　地球　日本　とある場所です

まだ夏に入りきらないような、それでも日本特有の体に纏わりつくような湿気を肌で感じるようになった六月の下旬。

その日の天候は雨で、横殴りの雨はいくらレインコートを着ていようとも、なかなか防ぎきれるものではない。

夜の帳も下りる頃、肝試し目的で廃電波塔に忍び込んだ若者たちから、儀式めいた簡素な祭壇の上で人が死んでいるのを発見したとの通報があり、その現場に急行せよとの連絡があつたのが数十分前。先に現場入りをしていた警官達に交じって現場検証を見学していた初老の刑事は、折角の非番の日だと言うのに、静かに酒も飲めないとはな。とため息交じりに愚痴た。

「諦めましょう、ゲンさん。これが僕たち公僕のお仕事なんですから」

すぐ横の三十代前半ほどの若い刑事が咄嗟に軽口を返す。

冗談だよと首をすくめた初老の刑事は、もう一度深いため息をつくとそのまま辺りをゆっくりと見まわした。

事件のあつたこの電波塔は随分前に廃棄されており、崩壊の危険があるため立ち入り禁止となっている。現場となつたのはその劣化がさらに顕著に表れていた屋上部分で、雨風に容赦なく曝されていた欄干部分からは、所々細い鉄筋が顔を覗かせていた。

穴があいている個所だつて一つや二つどころではない。雨風から守ってくれるはずの窓や屋根は全て砕け、雨曝しになった瓦礫の一部には苔が生している。

こんな瓦礫の上でこいつは何をやっていたのやら、と初老の刑事は遺体に視線を戻す。

整った顔立ちをした男で、意外にも年齢は若い。しかしその格好は明らかに通常の人とは異なっており、黒魔術師のようなローブを身に纏っている。

ローブの一部が焼け焦げて肌が露出しており、遺体の胸元には火傷の跡の様な赤黒い傷が見て取れる。電撃傷と呼ばれる熱傷の一つだと思われた。

「おや、ゲンさんじゃないか。今日は非番の日じゃなかったのかね」

突然その背後から、しわがれた男が声が響く。

ゲンさんと呼ばれた刑事がゆっくりと首だけを後ろに向けると、小太りの中年の男がゆっくりとこちらに向かってくるのが見えた。

「ああ、タモつさんか。いや、俺もそろそろ若いもんに任せてもいいと思ってたんだがな。まだケツの青いのだけじゃ心許無いのとこで、御上から急に呼び出されたんだよ。……まったく、おかげで母ちゃんの飯を食らい損ねちまった」

「こりゃ手厳しい。僕だって頑張っではいるんですけどねえ」

隣にいた若い刑事はおどけた返事をしつつも、心なしかその顔はどこか悔しそうだ。

その顔を見て苦笑いをしつつも、初老の刑事は捜査状況を尋ねるべく小太りの刑事に向き直る。

「……で、どうだいタモつさん。ガイシャについて何かわかったかね」

「そらぁ見ての通りだ。電紋^{でんもん}が体中至る所に表れてやがる。もしかしなくても雷が原因だな」

「やっぱりか…。まあどちらにしろ雷が原因じゃあ事件性は無いってことかね。……それにしても何だろうな、この装飾は」

やれやれと額を手で支えながら、指の隙間から遺体の周辺に目を向ける。

火の消えたるうそく、一部が欠けている髑髏。血の様に赤い色の魔方陣とそれを囲むようにして綴られている文字。祭壇の上には銀色のナイフと白い花が大量に飾られている。

どう見ても普通じゃない。

「カルトの信者か…、それともト占師^{ほくせん}か何かか…。どっちにしろオカルトめいた儀式的結果がこれじゃあホトケさんもどんな顔して逝ったらいいか分かるまい」

「もしかしてこのホトケさん、雷を呼び寄せる儀式でもしてたんでしょうかね。それで念願になってドツカンと…」

「馬鹿野郎。雷なんて毎日母ちゃんに落っこちてるよ。そんなことよりもっと別なところを建設的に考える」

「それだよ。ソレ」

「あん？」

突然小太りの刑事が意味深げな声で話しかけてきて、ゲンさんは思わず素っ頓狂な声を上げる。

小太りの刑事は胸元にあった手帳を開くと、太く短い指で器用に捲^{めく}っていき、目的のページを探し当てると、黙読するかのようにその表面を指で擦^{なぞ}っていった。

「ソレなんだがな。実は府に落ちない点がいくつかあるんだよ」

「どういうことだ？」

その真剣な面持ちに、自然とドスの効いた低い声が出てくる。

「まず1つ目だがな、ゲンさん。通常電波塔、もとい鉄塔の近くで雷が発生したらどうなると思うね？」

「そりゃあお前…アレだ。鉄塔にでも落ちるんじゃないのか？ 雷は高いところに落ちるって言うじゃねえか」

「まあ…そうだな。鉄塔つてのは避雷針を最高部に直付けするのが基本だ。真上からの雷はまずそこに落ちる」

「つまり雷はすべて避雷針に落ちるハズで、ガイシヤに直撃することなんてあり得ないって事か？」

「勿論違うさ。避雷針とて万能じゃねえ。いくら上からの雷に強かるうが、側面からの雷はそうもいかねえのさ。逆に引き付けるだけ引きつけといて、結局角度が足りず避雷針に落ちずにその下のどこかに落ちることもあるんだ」

「はあ。話が見えねえな、タモっさん。今のところ何も可笑しいことあ無いじゃねえか」

「だがな、普通は鉄塔の高さを半径とした円周内には雷は届かねえんだ。勿論確実について訳じゃねえが、大抵は避雷針に落ちなかったとしても電波塔の建物の角か外付けの階段に落ちる。早い話、ガイ

シャのいた場所は、屋外にしながら最も安全な場所だったってワケだ」

「ですが…必ずってわけでも無いのなら偶然にも雷が届いたってことだって考えられなくはないでしょう？ それに側雷撃って可能性もありますし…」

ゲンさんに代わって若い刑事が質問をする。

その質問を受けて小太りの刑事はペン先で額を掻きつつ、困ったような、悩んでいるような複雑な顔をした。

「側雷撃もなあ…一応は考えているんだが、ガイシャの位置から塔の足は随分離れているんだよ。何せ鉄塔のド真ん中、更にその真下にいた訳だからなあ。俺は専門家じゃないが、物理学的に見てもあり得るとは言い難いんじゃないかねえ」

「はあ。ではやはり直撃ですか？」

「それしか考えられんのだが…ちよつとガイシャの電撃傷の具合を見て分かったことなんだがな。どうもガイシャさん、合計三発以上の雷に打たれた可能性があるらしい」

「さ、三発う！？」

若い刑事は思わず声を裏返して叫んでしまったが、隣に立つゲンさんに睨まれて咄嗟に咳払いをして誤魔化そうとした。

「失礼。ええーつと…三発ですか。それは…例えば全て今回の事件で受けた傷なんでしょうか？ 例えばその内の二発は過去に受けた傷だとか…」

「生憎だが、一発は頭。もう二発は胸元に傷を残しているんだ。これで二発は過去の分だと出たら、ガイシャさんは五臓が焼けても生きていられるってことになるな」

「そ…そうですか。うーん…」

その言葉を受けて、若い刑事は頭を捻って悩みだした。その様子を横目で見ながら、ゲンさんは続きを促すように顎をしゃくる。

その表情はすでに貫録ある刑事のソレになっている。

「…成る程、最も安全な位置にいたガイシャが三発も雷に撃たれりや偶然で済ませる訳にもいかねえわな。…で、残りの疑問点は何だ？」

「えっとだな…、まず2つ目だがホトケさんの荷物だ。周りを見てみると、やたら儀式めいた道具やらが並んでいるにも関わらず、それを運ぶためのバッグなどが見つかっていないんだよ。もちろん車や荷車といった類の物も、だ」

「知り合いに頼んで車とかで運んでもらったんじゃないのか？」

「さてな。何せ身分を証明するものを持っていないから、知り合いを洗うことすらできん状況だ。まあこれはおいおい考えていくとして…次に3つ目だがな、この蠟燭を見たか？ これ溶けてるんだよ、雨降る中だな。地面に残る蠟を調べてはいるが、ここで蠟燭に火を付けたとみてまず間違いはないだろう」

「だが、別に雷は雨が降らずとも落ちることもあるだろう。考え方は苦しいが、別に不可能なことでは無いんじゃないのか？」

「…そこで先ほど気象庁に問い合わせた結果がコレなんだが…」

小太りの刑事は手帳をクルリとひっくり返し、ゲンさんと若い刑事の目の前に突き出した。

そこに書かれている文字を若い刑事が声に出して読む。

「えーっと何々…？ 6 / 2 2 雨。 6 / 2 3 雨。 6 / 2 4 雨…
…ってここ一週間の天気ですか！ なるほど、ずっと雨なのに蝋燭に火が付いているのはおかしいと？」

合点がいった。と、若い刑事は首を何度も縦に振る。

が、突然ゲンさんはそんな刑事の後頭をボカリと殴り、目を白黒させる彼を尻目に手帳の別の箇所を読み始めた。

「それだけじゃねえよ。……気象データによると、ここ一週間にわたり雷は観測される日は無かった。コレだな。一番見せたかったのは…」

「そうだ、流石ゲンさんだな。加えてずっと雨が降っていたにも拘らず、死体の腐敗がまったく進んでいない。恐らく死後3日は経ってはいないそうだ。胃の内容物を調べればもっと詳しく分かるんだが…」

「で…では、別の日に死んだ彼を冷凍して、ちょうどこの日にあそこへ置いたとか…」

「誰が何の為に？ 何故このタイミングでこの場所へ？ 先ほども言ったが、ホトケの死因はまず雷なんだ。偽装工作なんてする必要はない。肝心なところを忘れるな」

ははあ。と気の抜けるような、呆氣にとられるような返事を返した若い警部を叱責し、ゲンさんはスツと空を仰ぎ見る。

「このヤマア… なんだか異様な臭いがするな…」

雨はいつの間にか止み、その雲間から半分の淡い月が静かに現場を照らしていた。

しかしすぐに厚い雲に隠されて、辺りはあっという間に漆黒の闇に包まれた。

ブログ 〜地球 日本 とある場所〜（後書き）

ブログ最後まで読んでいただきありがとうございます。
そして申し訳ありません。これ読まなくても別にいいのです。
次回から世界観はおもいつきし変わりますので。

ちなみに探偵ちつくな雰囲気出してますが、全然そんなこと無いで
す。

よろしければ最後までお付き合い宜しくお願いいたします

物語の始まり 鉄人達の遺跡にて (上)

誰かの話し声が聞こえ、その声に交じって心地よい音楽と美しい歌声が混じり合うように彼の意識の中へ飛び込んでくる。

その会話の内容と、流れている音楽の歌詞、曲調はしっかりと理解できるのに、何故か思考と聴覚以外がはつきり機能しない。と言うよりも存在していないと表記するのが正しいのかもしれない。

彼が自我を意識したのはつい先ほどではあるが、この不自然な状況に気が付くのにもしそれほど時間はかからなかった。

意識の水底には、確かに自分自身が人であつた記憶は残っている。淡く輝くアクアマリンの海、何処かで嗅いだ香水の匂い、真っ白なミルクをふんだんに使ったシチューの味……その全てを覚えている。しかし、それに対応する五感が今の自身に見当たらない。

そもそも自分に肉体があるのかすらも怪しい。草原を駆け抜けた記憶はあるのに、息を深く吸い込んだ時の気持ち良さも覚えていない、今それをしようとしても動かせる肉体が何一つ無いのだ。

意識の座である魂は何処にあるのかと問われ、昔の人は肉体で無く精神に宿ると結論出したのは正解なのかもしれない、と彼はぼんやりと考えた。

(もしかして……僕は死んだのか……?)

さも当然のようにそんな思考に彼は辿り着く。

もちろん声には出せていない。心の中で文字をなぞっただけ。

舌も無い、肺も無い。今自分が持っているのは、ふわふわ漂う意識と、何処に付いているのか分からない透明な耳だけなのだ。

いや、耳というものも恐らく存在しない。聞こえているというよりも意識に直接流れ込んでると言ったほうが正しいのだろう。

彼は只管にこの状況について考える。存在しない頭を抱えてうん、うーんと悩み始め、ある時にふと気が付いた。

此処まで来て彼はようやく、この状況に驚いている自分自身を発見したのだ。

それから暫くの間——と言っても時間の概念が在るかは分からないのだが——彼は自問自答を繰り返し、結局答えらしきものは何一つ考えつかなかった。

ただその代わり、非常に興味深い事実を2つほど発見した。

1つ目は彼自身の記憶について。

基本的な知識や常識、経験の類や何かしらの記憶は残っているのに、思い出といったものや自分に関する記憶が綺麗サッパリ無くなっているのだ。

特に名前まで思い出せないのは非常によろしくない。

2つ目は自分自身の状況について。

彼が自分という自我を意識したのはつい先ほどの事ではあるのだが、どうやらその自分自身というものは壊れていく真つ最中だったらしい。

と言うのも、いつの間にか心地よい音楽は何かが歪んで軋む音に代わり、美しい人の声は人のものとは思えない醜く無機質な声に変っていたのだ。

折角残っていた聴覚がこの様にして狂っていくのを、彼はただ只管残念に思った。

そう考えている間にもどんどん音には亀裂が入り、その隙間から僅かに聞こえていた人の声も、歪んだノイズに掻き消されていった。

（もしかして此処は地獄で、こういう感じの罰を今受けているのかなあ）

再び心の中で文字をなぞる、一人さもしいだけの自問自答。

勿論答える人はいない。聞こえる音も今となってはただの雑音である。

そして静かに心へ意識を向け、只管思考に集中する。先ほど思いついた、ここは地獄だという考えは強ち間違っではないのではないだろうか。

自分自身は今まっさらな魂の状態で、余計な機能を振り落している最中なのだと。

死後の世界など信じていなかった——と言っても記憶がないから分らないが——のだが、この状況はどう考えても生きて経験できるものでは無い。

(そう考えると…やっぱここは地獄k e s楔18u9あso9爵w
れ)

突然思考にまでノイズが走り、じわりと黒い影が思考を浸食していく。

その瞬間、彼は自分自身という名の魂の最期を悟り、結局自分自身が何者か知ること無く終わってしまうことを残念に思った。

ただ思っただけで、今や心の中で文字として表すこともできない。最後まで残った意識は、最早ソフトを失ったハードウェアであり、機能することは何一つない。

そんな思考も今や最後だ。もう彼の自我はほとんど空転しており、何を考えているのかすら解らない有様だった。

(Lh3o.....5・a・・)

意識はあるが自我は無い。植物人間の様な、眠っている人のような。

そしてとうとう最期の時が訪れた。ゆっくりと、ゆっくりとまどろむ様にその意識が途切れるその瞬間。

その最後の刹那に彼の空白の心に文字では無い、何かインクのような一滴がポタリと落ちた。

(*****)

その瞬間、視界が爆ぜた。

* * * * *

「ウホッ！」

「のわぁ！」

バネ仕掛けの玩具のように少年がベッドから跳ね起き、その顔を覗き込んでいた少女が素っ頓狂な声をあげて後ろへすっ転んだ。

少年はしばらく虚空を見つめていたが、その後何かに気付いたかのように自身の両手をじっと見詰め始めた。

どういうことか、手を握ったり開いたり動作を繰り返し、それを不思議なものでも見るかのように少年はひたすら見つめ続ける。

「ちょ… ちょっとあんだ。何やってんの？ …ていうか今『ウホッ』って…」

尻もちをついたまま縮みあがっていた少女が恐る恐るといった風に少年に声をかけ、それに気付いた少年が首だけをギギギッと緩慢な動作で少女のほうへ向ける。

表情が不気味なほどに無表情で、少女は再び縮みあがった。

「あれ……あれ？ 僕ってまた死んだの？ 無限変な音地獄はどうなったの？ 釈放？」

少年が初めて声を上げる。声質は普通の少年と変わらない。

それを聞いた少女は眉根に皺をよせ、変な物を見るかのように少年を睨みつける。

「は、はあ……？ あんた頭とか大丈夫なの？ もしかして改造魔法カスタムに失敗しちゃった人？ そんなわけ無いよね。あんな上空から落ちてくるなんて普通じゃ無いもの」

「改造魔法カスタム？ 何それ？ 変なの拾い食いでもしたの？ ていうか君だれ？ 此处どこ？」

「変なのはお前だっつーのっ！ ……まったく。大体助けてやったんだから感謝の一つでもあつてもいいハズなのに……」

「はて、助けたって？ 君が僕を？」

「そうよ！ アンタが空から落ちてきたのをあたしが受け止めてあげたの！ もしあたしが助けてなかったら、あんた今頃地面の染みになってたわよ！」

少年はそれを聞いてコテンと首を傾げる。

その様子を見ていた少女が今度は憐れむような目を向けてきた。

「あー……なるほど。恐怖のあまりに気が動転しているのね？ 可哀そうに……。あんたはね、ここ遙か上空から落下してきたの。それ

をわたしが逸早く見つけて、身を呈してあんたを助けてあげたわけ。
理解できる？ OK？ アンダースタン？」

「つまり、あの変な音地獄はもう無いってこと？　っしゃー、良かったー」

「ちょ… ちょっと。話聞してる？　あたしが落ちてきたあんたを…」

「で、君は誰？　此処どこなの？」

「……」

額の脇に青筋を立てた少女は顔を俯かせて身震いをする、ベッドの脇に置いてあった装飾の付いた木の杖ひったくる様に掴み取る。そして杖をビシッと少年も目前に突き立てると、声高らかにこう叫んだ。

「いいわ、そんなに知りたいのなら教えてあげる！　あたしの名はネム！　オーレ魔法学院の成績優秀者にして未来の魔女候補の1人！　この若さで2つの改造魔法^{カスタム}を実装している天才魔法使いのネム様とはこのあたしのことよ！」

無い胸を誇示する様に、胸を張った少女はベッドの上の少年に自分の偉大さを説くかのように鼻息荒く説明をした。

それでも少年の反応はいまひとつ変わらない。その様子を見て、ネムと名乗った少女は額の青筋を更に濃くした。

「ちょっとお…！　本当にあたしの事知らないの？　あたし結構この界限じゃ顔も名前も知られてるのよ？」

顔を赤くして地団駄を踏みながらネムが答える。どうやら激昂しているようだ。自分を知らないのが気に食わないらしい。

少年は何が何だかわからないと言った風にネムに訊ねる。

「魔法…？ 何言ってるのさ。そもそもさっきから空から降ってきたの、改造魔法だの、訳が分からないよ」

「訳が分からないのはこっちの台詞よ！ …まったく。てゆうか何？ あんたその歳で魔法も知らないわけ？ あんたもしかして此処の住人じゃないの？ …まあいいわ。良く見てなさい。これが『魔法』よ」

そう言うとなムは瞳を閉じて、何やらぶつぶつと唱えだした。

何かしらの意味のある言語なのだろうが、聞いている分には口をもごもごさせてるだけにしか思えない。

そして突然目を開けたかと思うと杖をビシッと虚空に向けて突き出した。

「実行！ 燃えろー！」

ネムが高らかにそう宣言すると、突然杖の先から赤々とした炎が噴き出した。

その光景に初めて少年の顔が驚きの表情に変化した。目が完全に点になっている。

その様子を認めたネムはふふんと満足げに笑うと、今度はそばにあった椅子を宙に浮かせて、その上にどっしりと腰を据えた。

少年を驚かせて気を良くしたのか、その顔にはサディスティックな笑みが浮かんでおり、足を組んで高みから少年を見下すその姿はなかなか様になっている。

「どう？ 分かったかしら田舎者君。これが魔法で、私はその魔法を操るエキスパートなの。この界限じゃ名の知れ渡っている、天才魔法使いよ。消し済みになりたくないのなら、口のきき方には気を付けることね」

威厳たつぷりに、そしてどこか少年に己の偉大さを誇示するかのようにネムはそう言った。先ほどに比べて自称している内容が若干大げさになっているのだが、少年はそれを気にしている風では無かった。

では何をしているかと言うと、相も変わらず先ほど炎の出た個所を針で刺すかのようにじっと見つめている。

その異様な光景にネムは若干の不安と恐怖を覚える。

と、そこへ少年がポツリと口を開く。意外にも人間味のある、感嘆を帯びた声だ。

「本物の魔法だ…、すっごい。僕魔法使いの国にでもトリップしたのかなあ」

「何？ あんた魔法の事知らなかったんじゃないの？ その口振りからしたら魔法の事知ってたようだけど…」

「知ってるけど信じて無かったただだよ。君、魔法使いだったんだね」

少年の言葉を耳にしたネムは、「こいつは一体何を言っているんだ？」という風に少年を変な物を見るかのように睨みつける。

イカれているのか、それともただの演技なのか。見た感じでは害意も敵意も感じなかったネムだが、流石に人の素性を一目で見抜くほどの観察眼は持ちえていない。

一体全体、こいつは何を考えているー？ そう思った矢先、ひと

つのある疑問が泡のようにプカリと思考の海に浮かんできて、爆ぜた。

そう言えばこの少年は一体何者なのだろうか？

そしてようやく彼女は気付いたのだ。自分は何一つ目の前の少年について知らないという重大な事実。

元来先に聞いておくべきことではあるのだが、少年のあまりの奇怪な行動にすっかり失念していたのだ。

改めてネムは少年を見つめる。

生気のない赤い目と病的なほどに白い髪と肌。加えてその体軀は驚くほどに細い。

突然襲われたとしても、健康的な人間なら例え女性であっても軽く押し伏せられそうな弱々しい外見に騙されていたが、もし悪魔憑きだったら危険極まりない。

ネムの額に一筋の汗が流れ、乾いた唇を無意識のうちにペロリと舐めた。

「あ…あんだ。本当は魔法について知っていたじゃないの？」

「信じて無かったただけだってば。ま、実はちょっぴり手品かもって疑ってはいるんだけどねえ」

焦点の合わない目をネムから天井に移しつつ少年は答える。

こいつはいったい何者なのだろう、という疑念が思いに先立ち思考に纏わりつき、無意識のうちに杖を強く握らせる。

見たる風には害意は無いようだが、会話から察するに頭のネジが数本飛んでいることは確実である。最悪、悪魔憑きだった場合に備えて警戒していても損はあるまい。

ネムは先ほどの高圧的な態度とは打って変わって、恐る恐ると言

った風に少年に話しかけた。

「じゃ…じゃあ聞くけどね。空から落ちてきたり、訳分かんないこと言ったりで、結局あんたは何者なのよ？　そうよ！　こっちだって名乗ったんだからそっちも名乗りなさいよね！」

最後の部分だけ緊張で妙に上擦ってしまい、ネムは少し頬を赤く染める。

その声に少年が再び首だけをギギツとネムのほうに向ける。その様子にネムも若干たじろぐが、あれだけ尊大な態度を取っておいて、いまさら情けない姿は見せられない。

キツと少年を睨むようにネムは彼の視線の先に立つ。相変わらず少年の表情は元の仏頂面に戻っている。

少年が口を開く。返ってくる答えは天から遣わされた天使様が、それとも樂園を追われた悪魔か。空から降ってきておいて、何もありませんなんてことはあるまい。ネムは固唾を飲んで答えを待った。

「僕は…そっぴや僕は何者なんだろう？」

「へえ…っ？」

しかし返ってきた少年の答えは、想像したどれでも無かった。想定外の答えに思わずネムは呆氣にとられたかのような声を出してしまった。

「覚えてない。一応言葉とか常識とかは分かるんだけどさ。過去の自分の記憶については思い出せないんだ」

「記憶が無い…？　う、嘘ついてんじゃないでしょうね！　騙そうってそうは—」

「えっ？　僕なんか嘘っぱちなこと言った？」

コテン。という音が似合いそうなほどに、少年は首を横に傾けた。とてもじゃないが嘘には見えない。

「つまり…本当に記憶喪失ってこと？」

「そう言ってるじゃん」

「は…はは……なーんだ」

ネムは力が抜けたかのように全身を弛緩させる。

「もしかしたらとんでもない奴かと思っただのに、緊張して損した」とばかりに投げやりな溜め息をつく、体を大きく後ろに仰け反らせた。

そんなに簡単に信じてもいいのかと思っただが、考えてみれば魔法を見てあれほど目を丸くした人間が、悪魔憑きははずないのだ。

悪魔憑きは感情を表さない。それを思い出したネムは、天井に向かってもう一度大きな溜め息をつく、未だこちらに視線を向けている少年に向かって声をかけた。

「はあ…まあいいわ、信じてあげる。ついでにさっきの質問の続きだけだね。ここは『鉄人達の遺跡』の一つ、『鏡の塔』。この部屋はその一室で、あたしの研究室兼住居ラボになってるの」

「鉄人達の遺跡？　ここは遺跡なの？　それにしては随分…」

少年は改めてあたりを見回す。

初めてじっくり見渡したその部屋は、どこか近代の匂いを感じさ

せる小洒落た赤い壁に囲まれた部屋で、床は磨きのかかったフローリング。ベッドや机も完備し、まるでホテルの一室を思わせた。更に少女が苦笑しているその向こうには全面ガラス張りの大窓と、小さなベランダがあった。

「遺跡つつても、かなり発展した文明らしくてね。ここ一帯には、良く分からない金属や石で出来た塔が連なる様に建ってるのよ」

全貌が見たけりやその窓から覗いてみれば、と少女は顎で自身の後ろを指し示す。

すっかり少年に興味を失ったようである。少年はベッドを抜け出して窓のほうへ歩いて行く。心なしか足取りはふらついてはいたが、それでも少年は大窓まで辿り着き、その大パノラマを目に映す。

「あれ？　ここって…嘘お？」

その光景を見た少年の口から情けないほど緊張感の無い声が漏れだした。

その声を聞いたネムが、おや？　とばかりに少年に顔を向ける。

「何？　何か不思議な物でも見たの？」

ネムが不思議そうに少年の背後に立つ。

そして同じく窓の外をみて、「何だ、何にもないじゃん」と反応を返す。

「いや、だってここ……」

少年は窓の外に建っている塔と呼ばれる存在たちを指さした。塔と言うにはその建物は直方体すぎて、ガラス窓も至る所に取り

付けてある。例えるなら、高層ビル。

というよりも、そのまんま高層ビルが群れをなして建ち並んでいた。すぐわきを見れば大きな広告塔やアパートのような建物まで見える。

その中の一つに、少年が見覚えのある建物が一つあったのだ。記憶の片隅に残る、人だった頃の情景。

赤と白の二種類のコントラストが映える、日本が誇った旧電波塔。ここは――

「どう見ても東京じゃないか……」

眼前に聳え立つ東京タワーを見つめながら、少年は肺に残った空気を吐き出すかのように呟いた。

物語の始まり 鉄人達の遺跡にて (上) (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

誤字、脱字、感想などがございましたら、どうぞ一言残していただきたいと思います。

鈍筆ですが頑張ります。

物語の始まり 鉄人達の遺跡にて (中)

「あー、はいはい。分かった、分かったわよ。『トーキョー』にそっくりなんでしょ？ うんうん、そうよね。分かったから黙ってついて来なさい」

「そうなんだよー、まんま東京でさあ。僕びつくりしちゃって……。でもこういうオチって何処かで見たことあるんだけどなあ。確か……えーとえーと……」

「少しは人の話を聞きなさいってば……」

均等に並ぶの窓から夕暮れの明りが射しこむ廊下を、一人の少女と一人の少年が行く。

両方ともまだ若く、ミドルティーンほどだと思われた。

コツコツと先頭を歩く少女の背は低く、短く切り揃えた赤髪には彼女には不釣り合いな大きいとんがり帽子が乗せられている。

体を覆うぶかぶかなローブと左手に握りしめた杖が無ければ、一見道化師に見えてしまいそうである。

その後ろには丈の長いゆったりとしたガウンを着こんだ少年が続く。

地に足が付いていないかのようなフラフラした足取りは非常に危なげで、今にも転んでしまいそうだ。

加えてその肌と髪は、まるで色を塗り忘れたキャンバスのように白く、そのことも相まってか幽霊のような幻のような、そんな希薄な雰囲気身を纏わせている。

誰かがその様子を見たら、どこぞの仮装パレードかと勘違いされそうではあるが、不思議とネム——少女の名前である——以外の住

人の姿は見られなかった。

二人だけのお化けの行進は階段の前まで差し掛かるとピタリと足を止める。見ると内階段には明りが灯っていない。

と、突然先頭に行く少女が左手持つ年季の入った木の杖を大きく振りかぶり、先ほどのようにぶつぶつと呪文を唱えだす。

すると杖の先に橙色の淡い光がほっそりと灯り、暗い階段を明るく照らしだした。

「ここからは階段よ。足元に気を付けて着いて来るのよ」

「ん？ 電気つけないの？」

少年は仄かな灯りに照らされた階段を見た。

常務用ではないのか、圧迫感のある厚い壁に覆われた外光の一切ささないその階段には、それぞれの階を表示する電光灯のようなものが階段中の踊り場にそれぞれ付けられており、これが唯一の光源かと思われたが、電源が入っていないのか今はその機能を停止している。

これさえ点ければ一々魔法なんて唱えなくてもいいだろうに――。そう思って少年は声をかけたのだが、その質問にネムは首を傾げることにしかなかった。

「は？ 『デンキ』？ 階段降りるだけで、一々伝記をつけなきゃいけないの？」

「電灯ともいうけど」

「『デントウ』？ 何？ あんたの常識じゃあ階段を降りるたびに伝統を書き記す必要でもあるの？」

「ちょっと何言ってるのか分からないです」

「えっ…何そのあたしがおかしいみたいな言い方!？」

ネムは顔を真っ赤にして抗議する。

先ほどの行動と言い、どうやらプライドが高くも短気であるようだ。

少年はその様子を見てなるほどねえ、と一人勝手に合点がいったように首を何度も縦に動かした。

「もしかして雷とか電気とか分かんないの？ 魔法使いなら電気くらしい生み出せてもいいと思うのに、魔法も万能じゃないのかなあ」

「だから伝記って何がなのよ？ 何か比喩的な表現なの？ さっきから訳分かんないこと言ってる」

「電気は電気だよ。ビリビリするやつ。ビリビリー」

両手をだらしなくぶらんと弛緩させ、全身を小刻みに揺らして見せる。

しかしネムは少年が自分をおちよくってると思っただけで、頬を膨らませたままぷいっと少年に背を向けるとさっさと階段のほうへ歩いて行ってしまった。

「馬鹿馬鹿しい…。ほら、阿呆なことやってないで、さっさとついてきなさい、スカポントン！」

「擲った訳じゃないんだけどなあ」

ネムの様子を見て、少年は首を傾げつつもフラフラと後をついていく。

やがて儂いほど白い少年は、階段へと繋がる扉の中に闇と混じり、そして見えなくなった。

* * * *

「そう言えば僕ら何処へ向かってるの？ 東京タワー？」

『鏡の塔』と呼ばれていたネムの住んでいる高層ビルを抜け出すと、やがてちらほらと他の人物も見かけ始めた。

ちなみに今二人が歩いている所は両側六車線の車道なのだが、車の様なものも走っていないためか、はたまたそんな物は存在しないのか、自分らを含め皆平気な顔で通行している。

そんな最中声をかけたのは、儂いほど純白の少年。隣を歩く赤髪の少女はもう話すのも厭なのにと言った風に、露骨なしかめっ面を向けてきた。

「あのねえ……どこの世界に空から降ってきた不審者を自由に散歩へ連れて行く奴がいるのよ。あんたは記憶喪失だって言うし、正直あたしの手には負えないから、魔法学院の先生方に判断を仰ぎに行くのよ。分かった？」

「へえー……魔法の学校かあ。僕も魔法使えるようになるのかなあ」

相変わらず会話が成立していない。

それでもネムは如何にかしてこの少年に泡を吹かせたいらしく、どうせ通じないであろう意地悪を言ってみたりする。

「知らないわよ…。ともかく、判断次第では投獄ってこともあり得るんだから、そんな時はあたしを恨むんじゃないわよ」

「その時は素直に『この人に誘拐されました』って言うよ」

「どこが素直よっ!？」

ネムは額に青筋を立てながら少年に怒鳴るが、少年は何時も通り仏頂面の涼しい顔だ。

ちなみに最悪の場合投獄というのは本当の事ではあるが、まずそうはならないだろうとネムは確信していた。

罪を犯していない者を突然牢に叩き込むほど学院も腐ってはいない。ただ一つの懸念事項ならあるのだが…。

「ハア…。本当あんたと会話していると色々疲れるわ」

「話すだけで疲れるなんて、器用な人だなあ」

「お黙り! …まあいいわ。そろそろ着くころよ」

「うん？」

ネムが煉瓦造りの建物の角を曲がる。その曲がった先には一際異彩を放つツインビルが威風堂々と聳え建っていた。

全面ガラス張りの側面が、夕陽の光を受けて見事艶やかな色彩をその身に映し輝いている。

思わず溜め息をついて足を止めていると、前からネムの早くついてこいと怒声が響く。

少年はその声を聞いて慌てて——本当は全然慌てていないのだが——

―ネムに追いつくと、共に紫の雲と橙の空を映すグラデーシヨンの中に吸い込まれていった。

中に入ると近代的外観とは打って変わって、見事中世西欧のオカルティズム満載の胡散臭さ漂う『魔法使い』仕様になっていた。赤い絨毯に煤の付いたランプ。謎の骨と色付きの煙に加えて、謎の呪詛の様な言葉が延々と壁や床に書き綴られている。

それだけならまだしも、何処となく漂ってくる刺激臭には流石の少年も顔を顰めて鼻をガウンの裾で覆った。

「これは酷い…おっさんの足の裏のような臭いがする」

「あのねえ…もうちょいマシな例え方は出来ないの？ ま、別に何処も彼処もそんな臭いがするわけじゃないから安心しなさい。」

こつちよと手招きするネムについて行った先は大きなホールになっていて、何階か打ち抜きの要領で吹き抜けになっており、天井部分には何故かどこぞの大聖堂よろしく、壮大な油絵が描かれていた。そこには数多くの人で賑わっており、そのほぼ全員がネムと同じようなローブを見に纏っていた。恐らくここが学校の中心地なのだろう。

周りを見れば動かないエスカレーターや、水の出ていない噴水が見て取れる。やはりここでも文明の利器は使われていないらしい。

店子には購買部のようなものから休憩場所として開放されているものまで、ピンからキリまで入っており、どこも人がいっぱいであわっていた。

それでも今日は学院の休日らしく、ここにいる生徒はいつもの半数程度とネムは言っており、いつもはどれほど雑多な所なんだろう

と少年は益の無い考えをし始める。

と、その時。その喧騒の中から突然大きな声がした。

「やっぽー、ネム。休日ガッコに学校来るとか精が出るのー。何か用事なん？」

突然大声で呼び止められてネムはビクツと肩を震わせた。

何事だと振り返ってみたその視線の先には、黒紫色の艶の無い髪を後ろに一つに束ねた大柄な少女が手を振ってこちらに歩み寄ってくるのが見える。

それを見とめたネムも口元をほころばせ、大柄な少女のほうへ歩み寄っていった。

「あれ、ハーポじゃない。あんたこそどうしたのよ。今日授業なんて予定にないハズでしょ？」

どうやら話しかけてきた少女とネムは知り合いらしい。

今だってネムは少年の前では初めて少女らしい笑みを顔に浮かべている。

「いやな、今度『鳥達の墓場』まで行く機会ができてな。一応一人はメンバー決まってるんやけど、それだけやと心許無いからあと二人ほど連れて行こうと思ってなあ」

「えっ…マジで？　じゃあはい！　行く、あたし行く！」

「んー？　別にええけどさ、ネム。あんた用事があつてここまで来たんやないの？」

諸手を挙げてまで行く行くと息巻くネムを、ハーポと呼ばれた少

女が宿めかかる。

先に用事を済ませなきゃいけないでしょ、と説得されようやく自らの目的を思い出したネム。やっと落ち着いたようだ。

「む…そうだった。こいつをシロネコンとこまで連れて行かなきゃ…」

「こいつ？」

「ん」

ネムは後ろで間抜け面したまま突っ立っている少年に親指を指す。自分が議題に挙がっていることを知らないのか、少年は一心不乱に道歩く人を眺めている。大した集中力だ。

ネムは左手に持っていた杖でコツンと少年の頭を叩き、それでようやく少年も気が付いてハーポの方を向く。

「何さ？ この人がお偉いさん？」

少年が聞き、ネムは勿論違うと即座に首を振る。

「あたしの友人よ。まあ取りあえず今は黙っておきなさい。あんたが喋るとややこしくなるから」

再びネムはハーポに向き直ると、こいつよ。と少年の肩を抱き寄せ、ハーポの前に出させる。

最初は少年が何か言うのかと思っていたのだが、案外大人しく少年はされるがままにされている。最初からこうだったら可愛げがあったのに、とネムはちよつと剥れて見せた。

一方ハーポは少年を見つめながら微動だにしていない。

「こいつなんだけどね。こいつが厄介な奴でさあ、今からシロネコ
んどこに預けてようと思ってたわけ。で、その後…ってハーポ？
どうしたのよ？」

「かつ…」

「かつ？」

「かわええええええええええええつ！」

突然ハーポが少年を思いつきし抱きすくめ、その小さな顔に頬擦
りをする。

少年は突然のアクションに目を白黒させていたが、ハーポがハグ
する腕に力を入れてメキメキキツという音がし始めると、途端に
口から泡を吹き始めた。

その様子を見ていたネムは慌ててハーポを少年から引き剥がすが、
少年はすっかり伸びてしまっていた。

「ちよっ…突然何すんのよ！ 確かにこいつはム力つく奴だけど、
そんな行き成りサバ折りは酷いんじゃない…」

「え？ ハッ！ ごごごごご、ごめん！ ああ、御免よお。大丈夫
か？ 余りに可愛くて…つい…」

誰に無く言い訳をするハーポを尻目に、ネムは少年の状態を確認
するが、泡吹いて完全に気絶している。この分じゃ気が付くまでも
う暫くかかりそうだ。

まったくネムは腰に手を据えて困った顔をする。

「しつかし…いくらハーポが怪力だからって、女の子に抱きすくめられただけで絞め落とせるとは…コイツただけ脆弱な体つきしてんのよ」

「誰が怪力やねん、誰が！…まあええわ。いや、ほんにすまんかった。この子が悪い分けちゃうし、そう責めたらあかんやろ」

「ん…まあそうなんだけどね。でも困ったなあ。これじゃコイツが起きるまでここで足止めかあ」

「ん、そげな事ならウチに任せとき。この子シロネコんとこまで連れてくんやろ？　ウチが運んだるわ」

さっきのお詫びや、と腕まくりしつつハーポが答える。

その腕はそれでも少女らしく細くしなやかではあるのだが、流石というべきか少年を軽々と御姫様抱っこの形で担ぎあげて、さあ行こかと涼しげな顔で歩きだしてしまった。

その後ろ姿にネムは心配事について声をかける。

「まあ助かるから別にいいけど、あんた『鳥達の墓場』に行くんじゃないの？」

「流石に今から出発したら着くのは夜になってしまいうやろ。出発は明日あたりにしとるから安心せえ」

「そう？　ならいいんだけど」

ネムは急いでハーポの後を追うが、それでも口は止まらない。

そこには傲慢でも意地っ張りでも無い、友人と戯れる年相応の少女の姿が見て取れた。

「あー、後そいつ一応男だから、御姫様抱っこは止めといてあげなさい」

「えっ！？ この子って男なん！？」

「そーよ。気付かなかったの？」

「そら気付かんわー…。あんだこの子に喋んなって言ってたし、見た目だけなら女の子に見えるし…」

「あ、それには同意。あたしも最初女の子と間違えちゃったもん」

「なんや、結局ネムも最初は分からなかったんやん」

「いいじゃない別に。あ、それと起きたら一応謝るときなさいよ」

「分かつとる、分かつとる…」

二人は軽口を叩きながら雑踏の中へと入り込んで行き、やがてその声も姿も、喧騒に吞まれて見えなくなった。

物語の始まり 鉄人達の遺跡にて (中) (後書き)

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

なかなか進まない本編ですが、実はもう結構この世界の正体についてのヒントを出しちやったりしてます。
気が向いたら探してみてくださいませ。

物語の始まり 鉄人達の遺跡にて (下)

(ここは―…どこだ?)

未だ意識がぼんやりして、うまく現状を掴みきれない。

この冴えない意識で分かることと言えば、何処かで似たような経験をしていたという事。そして、目下には荒れ果てた瓦礫の海が広がっているという事。この二つだけ。

音は聞こえない。臭いもしない。ただ、思考と意識、それと視覚だけがぼっかり切り取られたかのような、そんな感覚だ。

(あれ? これって…デジャブ?)

次第に意識が覚醒していき、視界もやがてハッキリと映る様になる。どうやらやや高い位置から見下ろす形になっているらしい。その廃都市が一通り見まわすことができる。

その惨状たるや、薄暗い曇天の下、錆つき歪み、風化していった建物の名残が至る所に散らばっているのが見て取れる。しかしその光景を見ても、不思議と悲観的な気持ちにはならなかった。

何故かと問われれば、その映る景色は兵器や生物といった外的要因によって廃れていったのではなく、永い年月をかけて少しずつ朽ちていったという事が感じ取れたからだ。

あたかも人類が全て居なくなった後のような世界。人の息吹が消えただけで、結構この世界は平穏な所なのかもしれない。

決して心温まる光景とは言えないが、それでも全てを悲観するよなこの世の終わりという感じでも無かった。

(聴覚の次は視覚か…。こんなモノ見せて、一体誰が得するんだか)

しかしそれだけである。数分見ていれば興味を完全に失ってしまふ世界。声に出せないのは既に知っていたが、それでもそう呟かすにはいられない。

何故こんな風景を自分が見せられるのか。瞬きも視点変更も出来ず、結構辟易しているのだ。

と、再びここで視界にノイズが走る。例えるなら壊れたテレビのように映像が上下に割れ、その所々に穴の様な染みの様な黒点がぽつぽつ表れ始める。

（今回はやけに短かったなあ。もう少し調べてみたいこともあったんだけど――）

映像が乱れ、景色が歪む。同時に意識にも暗幕が掛かり始めた。だが前回のそれとは違い、壊れていく風ではない。まるで眠りに落ちるかのように、静かに機能停止していくようである。

（また目覚めることができるのかなあ……。出来るならまたあの世界に……）

暗幕はもう意識の半分にまで降りかかっている。もう、眠い。

彼はもうこの世界には興味が無いといった風に、自らその漆黒を受け入れようとした。

だがその刹那、彼は完全にイカれた視界の片隅に気になるものがあるのに気がついた。

見つけたのは直方体の建築物。他のものと同様にその外観はすっかり退廃しているものの、他の建物とは明らかに違う点が一つだけあった。

（明りが灯ってる。あれは一体――）

この時代にも人の営みはまだ残っているのか？　そう疑問に思った時にはもう遅い。

あっという間に意識は遠のき、そしてブラックアウトした。

* * * *

「起きないわね」

「起きへんなあ」

「起きないのである」

三者それぞれ同じような発言をして、真っ白なベッドの上で互いに顔を見合わせる。

正確には二人と一匹。二人というのは勿論ネムとハーポの事であるが、最後に発言した年季の入ったバリトンボイス。これは明らかに彼女らの声では無い。

見ると、ベッドの両脇にそれぞれハーポとネムが腰かけており、そのベッドに寝かされているのは勿論例の少年である。

そしてその少年の枕元には真っ白い毛並みを持つチンチラペルシヤが一匹。壮年の男の声は明らかにこの猫から発せられていた。

「これは困った。これでは話も聞けないのである」

ペルシヤ猫が少年の顔を前足でペタペタしながら悩ましいといった声を出す。

傍から見れば、眠っているご主人様に悪戯をする飼猫と云った

ようなものか。非常な和やかな雰囲気醸し出してる。

彼が自身の部屋でゆっくりと毛繕いをしていた最中、ノックも中途半端にネムとハーポが部屋に押し掛けてきたのが十数分前。

今は彼女らが連れてきた——持ってきたともいえる——少年をベッドに寝かして、彼が起きるまで看病していたのだが、なかなか起きる気配を見せない。

ふっと軽く息をついた白い猫は、前足ふみふみを止めてハーポに顔を向ける。

「まったく……。ハーポ、お前は誰彼構わずサバ折りかける悪癖を止めるのである。非常に迷惑だ」

ベッドの横でぐへへと少々危ない顔つきで少年を覗き込んでいたハーポは、その声を聞いて照れたように笑うと、後ろ頭をポリポリと掻いた。

「いや、すみません。まさかこんな気絶しちゃうなんて思わなくて……」

「お前の想像してる以上にあれは危険なものだ。我も昔やられたことがあるが、あの時は死ぬかと思ったのである」

その時を思い出したのか、真っ白なペルシャ猫は憂うような声を出した。

その様子を見たネムは、手持無沙汰に椅子の上で宙を漕ぎながら、やれやれといった風に発言する。

「それはシロネコ先生とコイツが弱っちいからじゃないんですか？ あたしも昔やられましたけど、案外平気でしたよ？」

「あ、ネム。スマンがそら違うわ。ウチ可愛ければ可愛いほど強く抱きしめる癖があつてやな…」

「ちよつ…何よそれ！？ このあたしが可愛くないって言うわけ！？」

「ちゃう、ちゃうがな。そういう意味やないて。ウチはただシロネコとかこの子の方があなたよか…」

「それが納得いかないってのよ！」

ハーポの話を聞いたネムはふざけるなど言つた風にいきり立つ。まあ二人の男——しかも片方はおっさん——と比べられて可憐さで負けたと言われれば、年頃の少女としては当然の反応かもしれない。

その傍らで二人の口論を眺めている白い猫も、うんざりと云つた風に首を擡^{もた}げている。

「貴様らうるさいぞ。口論なら外でやれ。あと何度も言うつようだが、我の名はシロネコでは——」

「う…うん……」

その騒ぎが聞こえたのか、突然ベッドの上の少年が唸りだし、その声を聞いて全員が一斉に噤口する。

少年は洪面を作つて身を振り、呟きとも寝言とも取れる唸り声をひたすら出している。

誰も喋らない、動かないという異様な風景の中で、唯一少年はひたすら悶えるに悶え、それが数分続いた後に、ゆっくりとその目を

開いた。

「やっと起きたのね……」

ネムがやっとかと言った風に溜め息をついてそう呟くと、その声に反応して少年が首をネムの方へ向けた。

寝起きのせいなのか、その表情は柔らかく、胡乱気な瞳は小さく濡れている。

そんな様子の少年がどこかあどけない感じがして、ネムは内心少しドギマギしたが、真正面のハーポの危ない顔を目の当たりにして、自分はこのようになるまいと邪な考えを振り払った。

そんな心情を知ってか知らずか、少年は呟くように、囁くように、小さく掠れた声でネムに向かって口を開く。

「思い出した。『猿の惑星』だよ……」

「ハア？」

「あれは東京タワーじゃなくて、自由の女神だったけど……」

その弱り切った——と言ってもただ気絶していただけなのだが——表情は庇護欲を刺激するには十分すぎるものがあったが、その口から紡がれたのは相変わらぬ頓珍漢な事であった。

* * * *

少年が目覚めると、ハーポはすぐさま少年の手を両手で包みこみ、今までの事情の説明と、その件での謝罪の旨を伝えた。

その様子は、ベッドを出られない病弱な美少年を、精悍な少女が真摯に勇気付けている風にも見えなくもない。

二人とも美形なので、こう云う光景はなかなか絵になるのだ。しかし片や寝ぼけ眼を擦って欠伸をする間抜けな少年。片やその様子を、鼻息荒くギラついた目で見つめる危ない女。

事情を知らない女学生が見たら、黄色い歓声を上げるか、それとも真実に気付いて幻滅するか。

ネムは二人の茶番を白けた様子で見つめていた。

その一方で、少年の方は何も気にした風では無かったのか、ヘラヘラしながら気にしないようハーポに伝え、その興味を自分の膝元に座りこむ白い猫に移した。

白い猫は少年の顔をじつと見つめるようにして微動だにしない。

まるで置物のようであるが、時に独立した生物のように波打つ尻尾が、彼が生きていることを暗に示している。

少年はその様子が――何故か――甚く気に入ったらしく、先ほどから猫の頭を撫でたり喉を撫ったりとやりたい放題だ。

このまま何後も無く時間が過ぎていくのかと思ったその時、今までだんまりだった白い猫がその口を開いた。

「はじめまして少年。まずは謝罪をしておこうか。我が生徒が君に仕出かした不始末、大変申し訳ないのである」

「ん？」

少年の動きがピタリと止まる。よく見ると、器用なことに表情まで半笑いで固まっている。

その反応を見ていたネムとハーポはクスリと口元に笑みを浮かべ、白い猫は考え込むように、うつんと唸るような声をあげた。

「ネムからある程度のことは聞いてはいたが……その反応を見る限り、魔法を知らないというのは本当の事らしいな」

「だから言っただけじゃないですかあ」

白い猫が今までネムの言う事を疑っていたことを知り、ネムは心外だとばかりに声を荒げた。

そんな様子を見ている少年は、相も変わらず目を点にしたまま微動だにしない。

ただ口元だけは何かを言いたげに、時折ひくついていた。

白い猫は、そんな様子の少年を知ってか知らずか、慇懃な態度で再び語りかけてきた。

「コホン。まあ、まずは自己紹介をしておこう。我が名はトランクイロ。オーレ魔法学院の講師をしておる者である……と、言っても分からないか」

「これでも四つ星の称号を持つ大魔導師の爺さんなのよ。態度に気を付けなさいよね」

「ネム、余計な事を言うでない。それと我はまだ42である。爺さんではない。……まあ良い。君には分からない事だらけだろうが、少し話がしたくてね。構わないであるか？」

少年を優しく諭すように、どこか大人雰囲気滲み出る口調で語りかけるトランクイロ。

反応が芳しくない事をどう思っているのかは分からないが、それ以上彼はなにも語らず、真摯な視線をじっと少年に向けている。

そのまま誰も喋らないまま、このまま今日が終わってしまうのではないかと思われたその時。突然少年が口を開いた。

「ど…」

「ど?」

「どうしよう……おっさんが猫の姿に見える。とうとう僕も変になっちゃったのかな……?」

静寂が支配する部屋の中で、水の中にポタリと黒インクを落とし込んだかのように、そんな間抜けな台詞がプカリと浮く。

一瞬間が空き、少年の言っている意味を悟った少女達は、咄嗟に口元に手をやって笑いをこらえ、トランクイロはどんな反応を返せばいいのだろうかと思む様に首を傾げた。

「うう……。これからの人生、猫とじゃれ合う前に、おっさんかどうか確認していかなくちゃいけなくなるのか……」

やだなあ、と涙声で呟き、頭を抱える少年。本気で凹んでいるようだ。

その様子を見て、いい気味だとほくそ笑むネムに対し、その隣にいたハーポは、安心してと言う風になにに優しく語りかける。

「大丈夫や少年！ このおっさんはな、改造魔法^{カスタム}を使って自分の姿を変化させただけや。別に少年だけが猫に見えている訳やないんやで」

「あんたが頭おかしいのは元からだから安心しなさい。ま、今のあんたに改造魔法^{カスタム}だの何だの言っても分からないだろうけど。追々説明してあげるわよ」

そのような返事を貰って、少年はやつと顔を上げる。

その瞳には少しだけ涙が溜まっており、本気で凹まれた事にトランクイロは内心ショックを受けた。

その声の洪さとは裏腹に、その心は硝子でできているらしい。

「それにしても、シロネコ先生と初めて会った人は、普通『猫が喋った』って驚くのに……。やっぱあんた普通じゃないわね」

「ま、捉え様によつては、真実を見通す力があるってことやろうし。うゝん……ますます気に入ったわ、この子」

好き勝手言う少女二人を差し置いて、少年は猫に向かって疑るような、警戒するような視線を向ける。

まだ少女達の言う事を信じきっていないらしい。

「……安心するである。あ奴らが言った通り、我は改造魔法……まあ魔法の一種であるな。それを使って肉体を変化させているだけなのである。君だけが我の姿を猫と認識している訳ではない」

「……じゃあ僕はついさっきまで、おじさんをポフポフしてた訳？」

今度はそこかつ、とトランクイロは心の中で突っ込みを入れる。

それでもやはり年季の違いというものなのか、若干たじろぎながらも、慇懃な態度を崩さない。

「う……む……、まあそうなるな。しかし本物の猫にも、壮年の雄猫というのもいるわけであるし——」

「なーに言っちゃってるんですか、先生。こんなちんちくりんの言う事なんて気にしちゃダメですよ。それに、今は他にやる事が有

るでしょう?」

「む。確かにそうであるな」

ネムにそう呼びかけられて、咄嗟に自分の目的を思い出したトランクイロは、気恥かしかったのかオホンと咳払いをしてから、再び落ち着いた様子で語り始めた。

「先ほども言ったが、我は君と話がしたいのである。君には自分についての記憶が無いそうだが、聞くところによれば、別の世界についての記憶は持っているそうではないか」

「別世界? どちらの別世界?」

「どっち……とは? まさか君は複数の別世界に行った記憶が在るのかね?」

何だか話がややこしくなってきたぞ、とトランクイロは小さな前足で、器用に耳の裏を掻く。

隣でただ黙って聞いていたネムも、「何それ、初耳」と身乗り出して訊いてくる。

「んー……別世界っていうか、変な音地獄っていうか……」

「ああ。そういえばあんた、『地獄から解放された』とかうんたら言ってたわね」

「ん、んー……、まあ待て。兎にも角にも、とりあえず我は君の持っているその記憶に興味が在るのである。それを詳しく話してもらえないか?」

少し話が脱線して行きそうな気配がしたので、トランクイロは慌てて本題を纏め上げに入る。

少年は憮然とした様子で、その質問に頷き返す。

「それは別にそれは構わないけど……。僕って後の処遇の判断にここまで連れてこられたんじゃないかなかったっけ？」

「その事については心配ない。君が寝ている間に、簡単な魔法で君を調べさせてもらったが、君は我らの脅威となるべき人物ではないと判断されたのである。特に何かを課す訳ではないから、安心したまえ」

「ただし、素性の分からない人間を簡単に自由にさせる訳にもいかないの。だからここで簡単に取り調べ……。ってどこかしら」

少年はその説明を聞いて、なるほどね、と納得するように何度も頷いた。

トランクイロはこれで話が済んだと判断したらしく、器用にも右前足をだけをずっと少年の方へと差し出した。

「とにかくだ。我の事は先の事で分かってもらえたと思う。これから短い間ではあるが、君と色々な事について話していきたいと思う。どうぞよろしくである」

どうやら差し出された前足は握手のつもりらしい。

そんなトランクイロを見て、最初は目を白黒させていた少年も、恐る恐るといった風に差し出された前足を握り返した。

「参考になるかは甚だ疑問だけど……。うん、こちらこそヨロシク

ね。ネコさ——」

と、そこへ突然開け放たれた窓から突風が入ってきて、思わず少年は言葉を中断する。

その風は、部屋の中の書類を吹き飛ばし、窓枠を大きく軋ませると、何処かで嗅いだ事のある臭いを少年の鼻元まで運んできた。臭いを嗅いだ少年は、思わず眉を顰めてこう呟いた。

「おっさんの足の裏のような臭いがする……」

ピシリ——。

風の音が部屋を支配する中、誰かの硝子のハートがひび割れるような音が響いた——ような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9374r/>

靈魂達のシャングリラ

2011年10月7日23時41分発行